

終助詞「な」の機能

発話様式¹の適切さに関する諸要素から見た一考察

秋 山 学

0. はじめに

日本語の終助詞「な」と「ね」²に関しては、渡辺(1968)、鈴木(1976)などの指摘にあるように、その承接関係において両者は最後尾に位置し、文表現の重要な担い手となっている。次の例は、ある乳飲料のテレビCMで、若手の女性タレントが宣伝商品を飲んでつぶやく台詞である。

(1) 「こりゃ、生き返りますな」

ここで文末を「ね」と置き換えても、伝達される内容に差異はない。

(1) 「こりゃ、生き返りますね」

しかし、これらの発話の典型的な話者をイメージすると、文末に終助詞「な」のついた文（以下「『な』文」とする）には、文末に終助詞「ね」のついた文（以下「『ね』文」とする）に見られない、特定の性別や年齢層を連想させるところがある。つまり、(1)の話者としては、普通ならば比較的年配の男性が想像できるのではないと思われる。この「な」文に伴うイメージ的ギャップが、コピーとしての印象づけに役立っているわけである。

一方で、「な」文には次のような例も見られる。

(2) (夫) 「おい、電話だぞー」

(妻) 「あなた出てくださいな」 (めぞん一刻)

(2)は、明らかに女性の発話に見られる用例であり、(1)とは対照的である。本論文は、上例のように、「な」文が話者に関するイメージを様々に喚起することに着目し、終助詞のもつ発話伝達上の機能という観点から、終助詞「な」を統一的に記述しようと試みたものである。考察の対象としては、具体的な発話場面において、「な」文が適切であるか

否かを左右する要素として、「文末イントネーション」と「丁寧さ」³を取り上げ、これらの要素と終助詞の機能との相関を探った。

1. 終助詞「な」の機能

1.1 発話の指向性に基づく「聞き手」の区別

終助詞に関わる先行研究の多くでは、発話する側を「話し手」とし、発話を受ける側を「聞き手」として、対話での伝達のあり方を考察している。本論文では、発話様式を〈対話（「聞き手」から何らかの反応⁴が得られることを意図した発話）〉と〈独話（「聞き手」の反応を意図しない発話）〉に分けるが、その双方について、発話する側を〈話し手〉、受ける側を〈聞き手〉とする。

ここで、終助詞「な」と「ね」の機能的差異⁵に関して以下の仮説を提示し、話し手の想定する二種類の聞き手という考えを導入したい。

仮説： 終助詞「な」あるいは「ね」には、その発話が誰へ向けて発せられたものなのかを示す標識としての機能があり、「な」文と「ね」文には互いに対照的な発話の指向性がある。「な」文では、発話は話し手から見て心的に内の方向へ向かい、「ね」文では外の方向へ向かう。

ここから、「な」文あるいは「ね」文には、発話の伝達先として話し手の意識下で想定される、それぞれ異なった聞き手を考えることができる。すなわち、「な」文は〈内在的聞き手〉へ向けて、「ね」文は〈外在的聞き手〉へ向けて発話されているということである。

〈内在的聞き手〉は、「な」文の情報の受けとめ手として、話し手の意識に心理的に想定される自己の内側の存在である。したがって、話し手の自己同一性を認めるところから、発話内容が受け入れられるかどうかは問題にならず、その発話に対する何らかの反応を期待する意図も存在しない。つまり、内在的聞き手は、常に受け手に徹した鏡の向こうの自分のような存在である。

一方、〈外在的聞き手〉は、「ね」文の情報の受けとめ手であるばかりでなく、その発話に対し、応答や何らかの反応で応え得ると話し手が想定する自己の外側の存在、すなわち現実的な他者である。

1.2 各種用法と発話様式

前節での仮説に基づき、終助詞「な」を、以下の三用法⁶に分類する。

〈本来的用法〉 話し手の内在的聞き手に向けられた独話としての発話。

(3) 「いいな。わたしもビートルズのレコードほしいな…」 (ちびまる子ちゃん)

〈みなし用法〉 対話において（外在的）聞き手を内在的聞き手であるかのようにみなした発話。この「みなし」の働きにより、対話相手を身内や仲間と意識して親密さを示唆したり、待遇性に配慮しない自己の内面と同様に扱う面を際立たせて対等あるいは目下の社会的上下関係を示唆することができる。

(4) 「負けたらどうなるか、わかってるだろうな!?」 (美味しんぼ)

〈中間的用法〉 対話場面であることを話し手が自覚しながら、対話相手を内在的聞き手とみなさず、話し手自身（「みなし」ではない内在的聞き手）に向けて発する擬似的独話。対話相手が存在する場面で独話的に用いることにより、返答のはぐらかしや聞こえよがしの皮肉のような解釈が可能となる。

(5) 「あきれたな。これじゃまるで他社の人間が飯倉さんだけを見て東西新聞の社員は全員馬鹿だと思ひ込むのと同じだな」 (美味しんぼ)

このように、独話、対話それぞれの様式で用いられる「な」文が、実際の発話場面で適切に使分けられているのには、終助詞それぞれの固有の機能の他に、どのような要素が適切さを左右しているのかを明らかにする必要がある。次章では、終助詞とこれらの他の要素との相関について考えてみたい。

2. 発話様式の適切さに関わる要素

2.1 発話様式の適切さ

(6) 「あ、ビールのつまみにキムチもらうか。いや、それならカクテキのほうがいいな」 (ビビンパ)

(6)の例について、次のような発話場面と、発話の仕方の条件を想定するとして、それぞれの状況における「な」文の発話の適切さは、どのようになるであろうか。

発話場面：A 対話相手が向かい合って座っており、話し手が相手の顔を見て話す。
B 話し手が一人で個室にいて、メニューを見ながら話す。

発話の条件：① 文末イントネーションは上昇で、丁寧体を用いる。
② 文末イントネーションは上昇で、普通体を用いる。
③ 文末イントネーションは下降で、丁寧体を用いる。
④ 文末イントネーションは下降で、普通体を用いる。

なお、文例に文末イントネーションを表示する場合は、上昇を↑、下降を↓、で示す。

それぞれの容認度について、筆者の内省をもとに検討すると、A②(=6a)・B④(=6b)の組み合わせが、最も自然に感じられる。A①・A③(=6c)は、自然だが、丁寧体という点で、年配の男性が話し手であるかのようなニュアンスが加わる。

- (6a) (相手に)「いや、それならカクテキのほうがいいな↑」
- (6b) (一人で)「いや、それならカクテキのほうがいいな↓」
- (6c) (相手に)「いや、それならカクテキのほうがいいですな↑/↓」

A④(=6d)は、相手に下降イントネーションで発話している分、少し容認度が落ち、言外に「カクテキを相手に注文してもらいたい」というような含みを想定しなければ、落ち着かないように思われる。

- (6d) (相手に)「?いや、それならカクテキのほうがいいな↓」⁷

B②(=6e)は、上昇イントネーションである分、容認度が落ちる。例えば、注文を決めるのに迷っていて、自分自身に納得させるような状況を考える必要がある。

- (6e) (一人で)「?いや、それならカクテキのほうがいいな↑ (よし、決まった)」

B①(=6g)・B③(=6f)は、一人の状況で丁寧体を用いている点で、かなり容認度が落ちる。B③は、いつもそのような話し方をする特殊なキャラクターを想定でもしないかぎり、考えにくい。B①に至っては、もはや不適切といわざるをえない。

- (6f) (一人で)「??いや、それならカクテキのほうがいいですな↓」
- (6g) (一人で)「#いや、それならカクテキのほうがいいですな↑」

このように、各場面、条件での容認度の違いを見てくると、その発話が独話として適切か、あるいは対話として適切か、という判断を下すためには、終助詞以外の要素も考慮して、総合的に判断しなければならないことがわかる。次節では、そのような発話様式の適切さに関わる要素のうち、文末イントネーションについて、終助詞「な」および(対比的観点から)「ね」との関係を考察する。

2.2 文末イントネーション

終助詞の意味・機能とイントネーションの関係は、近年では、「ね」に関して、橋本(1992)、伊豆原(1994)などで、終助詞全般に関して、森山(1989)、轟木(1993)などで、論じられている。

本論文では、まず、発話様式の適切さに直接関わると思われる文末イントネーション

の特性について言及しておきたい。

森山(1989)では、イントネーションのタイプを、一般化する方向で記述しており、その分類基準について、次のように述べている。

文末に重点をおき、かつ認知的に有意義なものに限定する場合は、まず、通常は、上昇・下降の二種(急激な下降を別類とすれば三種)の別を区別するだけで十分であろう。(p.195)

また、下降調のイントネーションについては、次のように述べている。

ごく大きいレベルで言えば通常の伝達の発話は、下降の方が無標であり、下降とは、特に上昇しないということだとも言える。(p.175)

本論文でも、イントネーションの分類について、基本的には森山の立場に従うこととする。そして、「特に上昇しない」という観点から、平板調イントネーションについても、下降イントネーション(厳密に言うならば<非上昇調イントネーション>)に含めて考えることとする。

このような分類に基づき、森山が提言した一般的原則に、<イントネーションによる聞き手反応伺いの原則>(p.185)がある。この原則は、次のように定義されている。

イントネーションでは、「上昇調は聞き手の反応を伺う意味、下降調は聞き手の反応を特に伺わない意味」(p.185)である。

以下では、2.1で用例をもとに検討した発話の適切さの違いを、「ね」文との対比も含めて再考し、聞き手反応伺いの原則との相関を見る。

次の用例は、2.1で用いた「な」文の用例を「ね」文に置き換えたものである。「ね」文でも、筆者の内省に基づき、発話の適切さの度合いを表示した。

- (6a)' (相手に)「いや、それならカクテキのほうがいいね↑」
- (6b)' (一人で)「いや、それならカクテキのほうがいいね↓」
- (6c)' (相手に)「いや、それならカクテキのほうがいいですね↑/↓」
- (6d)' (相手に)「いや、それならカクテキのほうがいいね↓」
- (6e)' (一人で)「??いや、それならカクテキのほうがいいね↑(よし、決まった)」
- (6f)' (一人で)「??いや、それならカクテキのほうがいいですね↓」
- (6g)' (一人で)「#いや、それならカクテキのほうがいいですね↑」

まず、発話様式と、聞き手反応伺いの原則との関連を考えてみる。上記の例では、相

手があるのが対話、一人なのが独話である。聞き手反応伺いの原則によれば、上昇調が聞き手の反応を伺う意味なので、上昇調のイントネーションは、対話で用いられる方がより適切であるといえよう。これに対し、下降調は聞き手の反応を特に伺わない意味なので、下降調のイントネーションは、独話で用いられる方がより適切であると考えられる。これを裏付けるように、「対話—上昇」の組み合わせである、(6a)、(6a)'、(6c)、(6c)'の例では、不適切な例は見当たらない。「独話—下降」でも、(6f)、(6f)'が丁寧体の影響で容認度が落ちている点を除けば、やはり、適切な組み合わせである。

一方、発話様式とイントネーションとで相性の良い組み合わせとは、反対の組み合わせになっている例を見ると、丁寧さの選択の影響を除いても、容認度が落ちる例の多いことがわかる。「対話—下降」では、(6d)がやや使いにくいことを示しており、(6d)'は、外在的聞き手を認める「ね」文であることを支えにして、不自然さを免れている。また、「独話—上昇」では、該当するすべての例で容認度が落ちている(6e, 6e', 6g, 6g')。とりわけ「独話—上昇」の組み合わせにおいて、適切さが著しく落ちている要因には、独話において話し手が想定する内在的聞き手が、上昇調で示された反応伺いに応えることを、前提として期待できない対象である、ということが考えられよう。

残る問題としての(6e)と(6e)'との間に生ずる容認度の差については、轟木(1993)によるイントネーション(轟木でいう「音調」)のタイプに基づき、説明を試みたい。

轟木(1993)における「東京語の文末詞の音調に対応する機能と用法」の表から、「な」と「ね」に言及した部分を簡略化、再構成して以下に示す。

(表1) (轟木1993: pp.27-8による)

	拍内の音調 (イントネーションのタイプ)	意味・機能
「な」	平坦、強調上昇、下降、上昇下降	詠嘆、感情表出、独白的
	平坦、疑問上昇、強調上昇	確認要求、男性語
「ね」	平坦、疑問上昇、強調上昇	確認要求、情報伝達、聞き手と情報を共有していることの表明
	下降、上昇下降	同意要求、感情表出

轟木は、イントネーションのタイプを次の五種類とした。

- ① 平 坦： 聴覚的にきわだった上昇も下降もない。長さは短いのが普通。
- ② 疑問上昇： 聞き返しのときの発話の末尾にあらわれる上昇音調。ゆるやかに上昇し、語末を長く発話すればさらに上昇させることができる。

- ③ 強調上昇：普通に言ったのが聞こえなかった相手に再び強く言うときの発話の末尾にあらわれる上昇音調。早いポイントで急激に上昇し、長さが短い。
- ④ 下 降：長さが長く、聴覚的にも音声的にも下降が認められる。
- ⑤ 上昇下降：一度上昇してから下降する音調。 (轟木1993： pp.18-9による)

まず、表にある意味・機能を手がかりにして、次のことが言えよう。表中の「な」の上段が本来的用法に該当し、「な」の中間の用法もここに含まれる。また、下段が「な」のみなし用法である。「ね」は、下段の一部が「ね」の中間の用法で、「ね」のみなし用法と本来的用法は両段にまたがる。「ね」の用法については注6参照)

次に、発話様式とイントネーションの対応を見る。「な」の上段は独話であり、ここに欠けているタイプは、疑問上昇である。上昇下降を、森山のいう「急激な下降」と見れば、本来的用法の「な」文での文末イントネーションは、強調上昇以外はすべて下降調として一般化される。このことから、独話の「な」文で、上昇調が許されるのは、強調上昇としての読みだけだといえる。轟木は、この用例として、次の例を挙げている。

- (7) 「あいつはいいな↑」(うらやましそうに) (轟木1993： p.28)

この上昇調は、心内発話⁸でも許され、話し手の判断や感情を強調上昇によって内在的聞き手に強く焼きつけているという解釈ができる。(6e)も、強調上昇と考えられるので、自分に納得させているニュアンスが感じられるのであろう。

- (6e) (一人で)「?いや、それならカクテキのほうがいいな↑ (よし、決まった)」
 (6e)' (一人で)「??いや、それならカクテキのほうがいいね↑ (よし、決まった)」

では、(6e)'の容認度の低さを、同じく発話様式とイントネーションの対応から見てみよう。独話の「ね」は、中間の用法と考えれば、表中の下段の「ね」にあたる。ここで注目すべきは、上昇調に一般化できるイントネーションのタイプが、下段の「ね」に存在しない点である。したがって、(6e)'はみなし用法という解釈しか成り立たなくなる。しかも、みなし用法である以上、外在的聞き手とみなされた内在的聞き手に、反応を期待することはできないため、強調上昇としての認識強化の解釈に限られてしまう。それにもかかわらず、このような「ね」文の例では、独り言なのに自分自身に返答を求めるかのような、疑問上昇の解釈による不自然な読みが内省として想起されて、容認度をさらに落としてしまうものと思われる。

以上の分析から、文末イントネーションに関して、聞き手反応伺いの原則は、発話様式と「な」文・「ね」文とに有効な相関を示しており、さらにタイプを細分化して考察しても、適切さの度合いを正しく反映した一貫性を保っていることがわかった。

2.3 発話の適切さと待遇価値⁹

2.3.1 「な」文と丁寧さ

丁寧さとは、丁寧体（「です・ます体」）と普通体（「だ・である体」）によって、発話に待遇価値を反映させる、文法カテゴリーの一つである。丁寧さの選択と発話様式は、重要な関連があり、仁田(1991: pp.191-9)の指摘にある通り、丁寧体の使用は、聞き手(本論文でいう外在的聞き手)の存在を前提とする発話といえよう。したがって、通常丁寧体は対話にのみ用いられる。

(6f) (一人で)「??いや、それならカクテキのほうがいいですな↓」

(6f)' (一人で)「??いや、それならカクテキのほうがいいですね↓」

(6g) (一人で)「#いや、それならカクテキのほうがいいですな↑」

(6g)' (一人で)「#いや、それならカクテキのほうがいいですね↑」

このような例が、すべて発話の適切さの点で問題となるのは、文末イントネーションや、「な」あるいは「ね」の使用の違いによるものではない。いずれの例も、独話と丁寧体の選択が相容れないことによる、不適切さのあらわれである。

以下、「な」と「ね」の対比で、丁寧さの選択が関わっていると思われる言語現象を取り上げ、考察を試みる。

まず、丁寧体の「な」文がもつニュアンスが、何に起因するものかを考えてみよう。次の例では、「な」文の例の方に、話し手の性別(男性)と年齢層(比較的年配)を連想させるニュアンスが存在する。

(6c) (相手に)「いや、それならカクテキのほうがいいですな↑/↓」

(6c)' (相手に)「いや、それならカクテキのほうがいいですね↑/↓」

実例でも、丁寧体の「な」文は、このニュアンスを裏付けるものであった。¹⁰

(8) (男・36才)「訓練は分かりますが、それで……」

(男・44才)「おっと、そうでしたな。(後略)」

(シナリオ「大夜逃・夜逃げ屋本舗3」)

(9) (中年の雑誌記者・男)「いやあ、これは効きますなあ！」 (美味しんぼ)

丁寧体が選択された発話は、先に述べたとおり、話し手が外在的聞き手と想定し得る聞き手の存在を前提としている。この点で、丁寧体は、「ね」と共通する発話の外的指向性をそなえているといえる。話し手が丁寧体を用いると、他者の存在を認識したことに

なり、その相手を心的に自己の外側に置くことで、相手の主体性を配慮するといった待遇性を示すことができるのである。

これに対し、「な」は、丁寧体と一見矛盾する機能を示す。だが、次のように考えることができる。丁寧体で外在的聞き手を認めたので、共起する「な」は、独話の解釈ができず、みなし用法と考えられる。すると、丁寧体で相手の主体性を尊重すると同時に、「な」によって相手の発話への反応が前提にないことを示し、話し手が対話相手との待遇の意味¹¹での上下関係において、優位性を表すという解釈が成り立つ。丁寧体の選択は、相手の主体性を配慮すべき発話状況に、話し手がいることの認識のあらわれでもあるから、話し手が自らの社会的立場を意識していることにもなる。この点が比較的高い年齢層を連想させるのではないと思われる。また、話し手が社会的立場を認識したうえで、相手との上下関係の優位性を示すからには、身分や地位が確立されている者と考えてもおかしくない。したがって、社会通念的に、このような立場にある者が男性を連想させるのであろう。

2.3.2 働きかけの「な」文と待遇価値

「働きかけ」の文は、仁田(1991: pp.229-38)に従い、〈命令系〉と〈依頼系〉の形式に分けて考えることとする。双方の系には、待遇価値の違いで複数の形式があるが、代表的形式として、それぞれ次の二種を挙げる。

- | | | |
|------|--------------|--------------------|
| ・命令系 | (a)命令形 | 「見ろ」、「走れ」 |
| | (b)連用形+「なさい」 | 「見なさい」、「走りなさい」 |
| ・依頼系 | (c)「～てくれ」 | 「見てくれ」、「走ってくれ」 |
| | (d)「～てください」 | 「見てください」、「走ってください」 |

これらの形式と、「な」および「ね」文の関係を見ると、待遇価値の違いが文の適切さを左右していることがわかる。¹²

- | | |
|------------------------|-------------------------|
| (10) *見ろ <u>な</u> 。 | (11) 見なさい <u>な</u> 。 |
| (10)' *見ろ <u>ね</u> 。 | (11)' 見なさい <u>ね</u> 。 |
| (12) *見てくれ <u>な</u> 。 | (13) 見てください <u>な</u> 。 |
| (12)' *見てくれ <u>ね</u> 。 | (13)' 見てください <u>ね</u> 。 |

さて、上述の各形式で、待遇価値を反映している箇所に着目すると、命令系(b)では、「なさい」が「なさる」から変化し、依頼系(d)では、「ください」が「くださる」から変化した形であることがわかる。¹³「なさる」も「くださる」も尊敬の意味が含まれており、この点が、待遇価値に反映されているものと思われる。

一方、「働きかけ」の機能上、発話様式は対話なので、「な」はみなし用法の解釈で、「ね」は本来の用法の解釈で、それぞれ聞き手の反応を伺う働きが認められよう。ここで、注意しなければならない点がある。「な」や「ね」のつかない働きかけの文が、発話の命題内容の遂行そのものを直接要求しているのに対し、「な」文および「ね」文は、その発話内容の遂行について聞き手が応諾するかどうかを確かめているのではないか、という違いである。

例えば、次のような状況では、「な」も「ね」もつけない文の方が適切ではないだろうか。

(14) (タクシーで運転手に)「あ、ここでとめてください」

(14') 「??あ、ここでとめてくださいな [ね]

つまり、即座に要求した行為を遂行する必要がある場面では、まず、聞き手の了解を得る手順はふさわしくないのである。

このように考えると、「な」や「ね」で、まず相手に了解を図る意図を示す、聞き手配慮的な側面と、直接的に遂行を迫る働きかけの形式は、なじみにくいはずである。そこで、働きかけに待遇価値を持たせた(b)や(d)の形式で、聞き手配慮の意図を示唆するほうが、「な」文や「ね」文は安定するのではないだろうか。

だが、「な」文に関しては、みなし用法であることによる、聞き手への待遇価値の低下が、かえて「～てください」とはなじみにくい、という解釈も成り立ち得る。そこで、(2)のような例がどうして適切であり得るのかということに対して、以下のような解釈ができる。

(11)、(13)については、鈴木(1976)で、「待遇表現にしか下接しない」(p.67)女性の用法であるとする見方もある。たしかに、女性が「～てください」に「な」を下接する実例が前述の(2)の例である。

だが、ここで注意すべきなのは、文末イントネーションとの関係であるといえよう。女性が用いる場合は、下降調になるのではないだろうか。

(2) (夫)「おい、電話だぞー」

(妻)「あなた出てくださいな (↓/#↑)」

(めぞん一刻)

では、下降調であることによって、何が女性に適したニュアンスを生むのが問題となろう。これに対する答えとして、下降調イントネーションが帯びる独話的なニュアンスを挙げることができるのではないだろうか。相手に依頼や命令をすることは、行為そのものが自分の意向を押しつける一方的なものである。したがって、少しでも婉曲的に働きかけがなされるほうが、女性的な柔和さがこめられるはずである。つまり、(2)のような例では、依頼であることは形式上明らかで、待遇表現も選択されているので、

あとは形式上「な」を独話のイントネーションにして働きかけを弱めようとする手段が取られるのである。したがって、女性用の働きかけの「な」文は、話し手を優位にするみなし用法ではなく、中間的用法と考えられる。

3. おわりに

本論文では、終助詞「な」の発話の指向性に関わる機能が、発話の適切さを左右する他の要素との関係において、終助詞「ね」には見られないニュアンス、すなわち、話者の性別や年齢層の範囲を限定するような語用論的解釈を与え得ることを示した。

なお、本論文は、終助詞が担う発話伝達上の機能を一般化することにより、現実の発話に存在する終助詞の用法のヴァリエーションを統一的に記述することを目指した諸考察の一環である。当面の課題としては、「な」文の発話の適切さに関わる他の要素（例えば不定語）との相関性の考察や、「な」と他の終助詞との複合形（例えば「よな」）のもつ機能と語用法の記述などが考えられる。これらを積み上げていくことで、より大きな課題へ取り組むための足がかりとしたい。

[注]

- 1) 「発話様式」には、「対話」と「独話」がある。この区別は、宮崎(1993: pp.42-4)のいう「発話モード」を参考とした。
- 2) 本論文で扱う終助詞は、文の最後尾に下接する「な」および「ね」である。したがって、次の例のような(a)禁止および(b)命令を表す「な」は、承接位置が異なる（例えば「よ」が下接する）ので、別種と考え、考察の対象外とする。
 - (a) 「まだ帰るな(よ)」
 - (b) 「もう帰るな(よ)」また、考察対象となる「な」および「ね」は、長音化した「なあ／なー」や「ねえ／ねー」なども含めて考え、これらの代表形式として「な」および「ね」を用いる。
- 3) 仁田(1991: pp.185-202)でいうところの「文法カテゴリ」の一つ。
- 4) 聞き手の何らかの反応とは、その典型的なものに、対話に応ずる発話としての応答があるが、発話に対するうなずきなどの身振りも含めて考える。また、聞き手が話し手の顔を見ているといった態度も極めて希薄な反応ながら、聞き手が発話の対話性を認識しているあらわれといえよう。
- 5) 談話管理理論の立場から、田窪・金水(1996a,b)は、終助詞「ね」と「な」の「機能」について同じであると指摘しているが、本論文では、彼らのいう「機能」を終助詞の持つ「本質的意味」と考え、「な」と「ね」の差異を反映する部分を、「発話伝達上の機能」と考えることとする。
- 6) 同様に終助詞「ね」についても三用法に分類した。
 - <本来的用法> 外在的聞き手(対話相手)に向けられた対話としての発話。
(例)「寒くなってきたねー」 「ほんとだね」 (ちびまる子ちゃん)
 - <みなし用法> 独話において話し手自身の心中にある内在的聞き手をあたかも対話相手に話しかけるかのように外在的聞き手とみなした発話。
(例)「ああ、おかしい。私は、お古の人生なんだね。笑っちゃうよ」 (ちびまる子ちゃん)
 - <中間的用法> 話し手の周囲に対話相手としてではないものの、発話を聞きとめられる者がいることを話し手が意識しているとき、発話状況から独話と解されながら、潜在的に外在的聞き手(周辺の傍聴者の存在)への指向性をもっている発話。
(例)(説明を傍らで聞いていて)「へええ……食べてみたいねえ……」 (美味しんぼ)

- 7) 用例は、文頭に適切さの度合いの表示がつくことがある。文法的に不適切な文は、「*」で示し、発話された状況では不適切な発話となる文は、「#」で表示する。また、使用可能だが、不自然な文は「?」、「??」（さらに不自然）で示す。
- 8) 独話のうち、声に出さずに心中で発話されたものを「内心発話」とする。仁田(1991: p.195)参照。
- 9) 菊地(1997: p.32)参照。
- 10) 文例収集に用いたシナリオ 6 本中、「～だな」に女性話者の例が 3 件あったのに対し、「～ですな/ますな」を用いた女性話者の例は 0 件であった。
- 11) 菊地(1997: pp.33-42)によると、文の伝達内容の真偽を問題にしない「待遇の意味」には、六つのタイプがあり、その一つに(待遇の)「上下」がある。
- 12) (10)、(12)については、「見ろ。(いい) な↑」、「見てくれ。(いい) な↑」のような省略表現あるいは感動詞としての解釈なら、可能であるように思われる。だが、いずれにせよ、統語的には接続形式として、認められるものではなからう。
- 13) 『現代国語例解辞典・第二版』(小学館)参照。

[用例について]

- ・用例の出典は、各例ごとに示し、表示のないものは作例とする。
- ・用例中の下線は、引用者によるものである。
- ・用例冒頭の括弧書きは、発話状況を示すために、引用者が補足したものである。
- ・「ちびまる子ちゃん」の用例は、原文に句読点がないため、引用者が適宜補った。

[資料]

- ・映画シナリオ (月刊誌『シナリオ』による): 真崎慎・長崎行男・原隆仁『大夜逃・夜逃げ屋本舗 3』
- ・漫画: さくらももこ「ちびまる子ちゃん・11」/高橋留美子「めぞん一刻・10、11」/雁屋哲・花咲アキラ「美味しんぼ・22、23」
- ・小説: 清水義範「ビビンパ」

<主要参考文献>

- 伊豆原英子 1994 「感動詞・間投助詞・終助詞『ね・ねえ』のイントネーション—談話進行との関わりから—」『日本語教育』83号, pp.96-107
- 上野田鶴子 1972 「終助詞とその周辺」『日本語教育』17号, pp.62-77
- 菊地康人 1997 『敬語』(講談社)
- 鈴木英夫 1976 「現代日本語における終助詞のはたらきとその相互承接について」『国語と国文学』53巻 1 月号, pp.58-70
- 田窪行則・金水敏 1996 a 「対話と共有知識—談話管理理論の立場から—」『言語』25巻 1号, pp.30-9
- 1996 b 「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』Vol. 3 No. 3, pp.59-74
- 轟木靖子 1993 「東京語の文末詞の音調と形容詞・動詞のアクセントについて」『STUDIUM』20 (大阪外国語大学大学院研究室) pp.14-34
- 仁田義雄 1991 『日本語のモダリティと人称』(ひつじ書房)
- 橋本 修 1992 「終助詞『ね』の、意味の型とイントネーションの型—長く急激な下降イントネーションの解釈を中心に—」『日本語学』11巻 11号, pp.89-97
- 宮崎和人 1993 「『～ダロウ』の談話機能について」『国語学』175集, pp.40-53
- 森山卓郎 1989 「文の意味とイントネーション」『講座 日本語と日本語教育 1』(明治書院)pp.172-96
- 渡辺 実 1968 「終助詞の文法論的位置」『国語学』72, pp.127-35

付記 本論文は、平成 8 年度筑波大学地域研究研究科修士論文「終助詞『な』の研究—

終助詞『ね』との対比を中心に」の一部に加筆・修正を加えたものである。

(あきやま まなぶ 北星学園大学非常勤講師)